第三章　中の君の物語　中の君と匂宮との結婚

［第一段　薫、匂宮を訪問］

*三条宮焼けにし後は（三条宮邸が焼けた後は）、六条院にぞ移ろひたまへれば（薫君の中納言は母宮と共に六条院に移り住んでいらっしゃったので）、近くては常に参りたまふ（匂兵部卿宮の御部屋も近いので普段から参上なさいます）。宮も（匂宮も薫君の参上を）、*思すやうなる御心地したまひけり（望ましいことと満足なさっていらっしゃいました）。　*「三条宮焼けにし後は」は注に＜三条宮邸が焼失したことは「椎本」巻に語られていた。＞とある。今年の二月か三月のことらしい。

紛るることなくあらまほしき御住まひに（間違いなく理想的なお住まいに）、御前の前栽、他のには似ず（御庭先の植え込みも他の所とは違って）、同じ花の姿も、木草のなびきざまも、ことに見なされて（同じ花の姿も草木のなびくさまも格別に見えて）、遣水に澄める月の影さへ、絵に描きたるやうなるに（水に映った澄んだ月の姿さえ絵に書いたような美しい風情の中で）、*思ひつるもしるく起きおはしましけり（薫君の予想通りに、風流好みの匂宮は有明の月を愛でるために起きていらっしゃいました）。　*「思ひつるもしるく」は注に＜薫が想像していた通り。風流好みの匂宮は有明の月を愛でるために起きてきた。＞とある。

風につきて吹き来る匂ひの、いとしるくうち薫るに（風につれて吹き来る匂いがそれははっきり薫り立って）、ふとそれとうち驚かれて（ふとその人の到来を気付かされて）、御直衣たてまつり（匂宮は上着をお召しになって）、乱れぬさまに引きつくろひて出でたまふ（威儀を正して縁側に迎え出なさいます）。

階を昇りも果てず（すると薫君は庭先の階段を昇りきらず）、*ついゐたまへれば（途中のその場で蹲踞なさるので）、「なほ、上に」などものたまはで（匂宮は「どうぞ上に」なども仰らずに）、高欄によりゐたまひて（高欄に身を乗り出しなさって）、世の中の御物語聞こえ交はしたまふ（世間話を挨拶代わりに交わしなさいます）。　*「つい居る」は＜ひざをつく。ひざをついてすわる。＞また＜かしこまってすわる。＞また＜ちょっとすわる。＞と大辞泉にある。注には＜『完訳』は「挨拶のため、臣下の薫は親王に対して、卑下の態度をとる」と注す。＞とある。

かのわたりのことをも（匂宮が宇治の姫君たちの事も）、もののついでには思し出でて（何かにつけて思い出しなさっては）、よろづに恨みたまふも（いろいろと不満を仰るのも）、*わりなしや（薫君には困りものです）。みづからの心にだにかなひがたきをと思ふ思ふ（自分の姉姫への思いも適わないものをと思いつつ）、「さも*おはせなむ（妹君は匂宮が娶りなされば良い）」と思ひなるやうのあれば（という目論みもあるので）、例よりはまめやかに（薫君はいつもよりはじっくりと）、あるべきさまなど申したまふ（作戦など申し上げなさいます）。　*「わりなしや」は薫君目線での地文という語り口。以後しばらくは、この二人の場面の描写は薫君目線で語られるようで、匂宮には敬語遣いだが薫君には平準表現だ。で、薫君を＜わたし＞と言いたくなるほど、薫君の心情に即した語りっぷりが続くが、言い換え文ではやはり＜薫君＞と客観表現しないと紛らわしい。　*「おはせなむ」は、「おはす」がさ行変格活用なので「おはせ」は未然形であり、未然形に付く「なむ」は＜そうなると良い、そうなってほしい＞という願望意の終助詞らしい

ので、薫君が＜匂宮はそう為されば良い＞と考えている、という文意。「さも」の内容は、注に＜薫は中君を匂宮に結びつけ大君を自分のものしたいと考えている。＞とある。

明けぐれのほど(明け方に雲が掛かり)、あやにくに霧りわたりて(妖しく霧が立ち込めて)、空のけはひ冷やかなるに(冷気漂う中に)、月は霧に隔てられて(月は霧に隠れて)、木の下も暗くなまめきたり(この二人がいらっしゃる枯れ桜の木陰も暗くなって風情が増します)。

山里のあはれなるありさま思ひ出でたまふにや(宇治山荘での姫との文交わしを思い出しなさったのか)、

「このころのほどは(次の山荘訪問には)、かならず後らかしたまふな(必ず私を置いて行きなさいますなよ)」

と語らひたまふを(と匂宮がお話しなさるのを)、なほ(相変わらず薫君が)、わづらはしがれば(難しがるので)、

「女郎花咲ける大野をふせぎつつ、心せばくやしめを結ふらむ」(和歌 47-07)

「大原に 囲われて咲く オミナエシ」(意訳 47-07)

*注に＜匂宮の詠歌。宇治の姉妹を女郎花に譬える。推量の助動詞「らむ」は原因推量。＞とある。「女郎花(をみなへし)」は＜オミナエシ科の多年草。山野に自生。高さ約 1m。葉は対生し、羽状に全裂。夏から秋にかけて茎頂に、黄色の小さな花が傘状に群がり咲く。漢方で乾燥した根を利尿・解毒薬とする。秋の七草の一。オミナメシ。[季]秋。＞と大辞林にある。「おほの」は特定の地名なのだろうか、不詳。ただ、平原の一画に黄色いオミナエシが群生した光景はいかにも秋の風情だ。「ふせぐ」は＜防ぐ、守る＞。「こころせばし(心狭し)」は＜狭量だ＞。「しめをゆふ」を＜しめ縄を張る＞。

と戯れたまふ(と匂宮は揶揄なさいます)。

「霧深き朝の原の女郎花、心を寄せて見る人ぞ見る　(和歌 47-08)

「朝霧に 心で見える オミナエシ　(意訳 47-08)

*「朝の原(あしたのはら)」は大和国の歌枕。と注にある。「心を寄せて見る人ぞ見る」は＜本気で思いを寄せて世話する者だけが見える＞。

なべてやは(普通には、とても見れません)」

など(などと薫君が)、ねたましきこゆれば(憎まれ口を申せば)、

「*あな、かしかまし(ああ喧しい)」と(と匂宮は)、果て果ては腹立ちたまひぬ(遂にはと腹立って見せなさいました)。　*「あなかしかまし」の言い回しについては、注に＜『花鳥余情』は「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしかまし花もひと時」（古今集雑体、一〇一六、僧正遍昭）を指摘。『集成』は「「花もひ

と時」（盛りも過ぎてしまいますよ）の意を言外にきかす」と注す。＞とある。ただ、「花もひと時」が＜盛りも過ぎてしまいますよ＞という言い方では情緒がない。この「ひと時」は＜一瞬だから惜しい＞と読みたい。であれば、「あなかしかまし」も＜ああ喧しい＞と親しげな口調で貶しながら、実は＜何と賑やかな＞とその目立つ華やぎを楽しんで愛でているのだろう。したがって、「腹立ちたまひぬ」も戯れだ。

年ごろ*かくのたまへど（匂宮は年来このように姫君と面会できるように取り計らえと仰っていたが）、人の御ありさまをうしろめたく思ひしに（薫君は匂宮の相手と目する妹君の御人柄が良く分からずに）、「容貌なども見おとしたまふまじく*推し量らるる（垣間見た印象では、顔立ちは見劣りなさらないようだが）、心ばせの近劣りするやうもや（気立てが期待外れということはあるかも知れない）」などぞ、あやふく思ひわたりしを（などと懸念していたが、前回の訪問で妹君も間近に見知ったので）、　*「かく」は、匂宮が言った「このころのほどは必ず後らかしたまふな」を受けているのだろう。つまり、「今度は必ず」と念を押すということは、匂宮は以前から何度も薫君に姫と面会できるように取り計らえと要請していた、ということだ。尤も、この時点では匂宮は手紙の相手をはっきりと妹宮とは特定しきれず、そも姉妹のことを良く知らず、まして姉と妹の違いを認識する手掛かりは多くなかっただろうが、それでも漠然と妹君を意識していたようでもある。そして、薫君ははっきりと、姉は薫君と、妹は匂宮と、それぞれ結ばれれば良いと考えていた、というのが大体の事情だ。　*「推し量らるる」のは、薫君は、この夏に襖戸の鍵穴から妹宮の顔を覗き見た事が椎本巻五章五段にあったことと、姉姫の顔立ちから類推できたのだろう。

「何ごとも口惜しくはものしたまふまじかめり（何も残念な所は無くていらっしゃるようだ）」と思へば（と思えば）、かの、いとほしく（あの姉姫が、いじましくも）、うちうちに思ひたばかりたまふありさまも違ふやうならむも（一人で考え謀りなさった妹君を薫君に宛がうということには違うことになるようなのも）、情けなきやうなるを（薄情なようだが）、

さりとて（そうかといって）、さはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば（そのようにはやはり自分の考えを変えられない気がして）、譲りきこえて（妹君は匂宮に譲り申して）、「いづ方の恨みをも負はじ（どなたにも不満の無いようにしたい）」など（などと薫君が）、下に思ひ構ふる心をも知りたまはで（内心思って算段を立てている事も御存じなく）、心せばくとりなしたまふもをかしけれど（薫君が狭量で姫を隠していると匂宮が揶揄なさるのも苦笑ものだが）、

「例の（よくある）、軽らかなる御心ざまに（軽い遊び気分で）、もの思はせむこそ（姫を悩ませなさるのは）、心苦しかるべけれ（感心しませんね）」

など（などと薫君は）、*親方になりて聞こえたまふ（姫の親代わりのような顔で申しなさいます）。　*「おやがたになりて」は＜薫君が姫の親代わりになって＞。「聞こえたまふ」の主語は薫君で、此処で敬語遣いに戻る。校訂と注記で何とか文意を得たが、「年ごろかくのたまへど」からは特に、妙に理屈っぽく、まどろっこしく、紛らわしく、分かり難い。また、全体にどこか異質感のある何とも変な印象を受ける文が続いている。

「よし、見たまへ（いや、よく見てくれ）。かばかり心にとまることなむ（こんなに真剣に考えているのは）、まだなかりつる（未だ無かったことだ）」

など、いとまめやかにのたまへば（などと匂宮がとても真顔で仰るので）、

「かの心どもには(姫君たちのお気持ちでは)、さもやとうちなびきぬべきけしきは見えずなむはべる(そうなのかとあなた様の御手紙を本気にして結婚を考える様子はございません)。仕うまつりにくき宮仕へにこそはべるや(なかなか難しい仲立ちのお役目でございます)」

とて(と言って薫君は)、おはしますべきやうなど(宇治へいらっしゃった時の打ち合わせなどを)、こまかに聞こえ知らせたまふ(詳しく匂宮にお知らせ申しなさいます)。

[第二段　彼岸の果ての日、薫、匂宮を宇治に伴う]

二十八日の、*彼岸の果てにて、吉き日なりければ(八月二十八日が彼岸の明けで縁起の好い日だったので)、人知れず心づかひして(ごく内々に準備して)、いみじく忍びて率てたてまつる(最小編成で人目を忍んで中納言は兵部卿宮を宇治山荘に御引率申し上げます)。　*「彼岸」は＜春分の日・秋分の日を中日(ちゆうにち)とする各七日間。また、この時期に営む仏事。俳句では、彼岸といえば春彼岸のこと。[季]春。＞と大辞林にある。この彼岸は秋彼岸で、今の暦だと秋分は9月23日ごろであり、彼岸明けは26日ごろとなる。

后の宮など聞こし召し出でては(母宮の皇后がお聞き知りあそばしては)、かかる御ありきいみじく制しきこえたまへば(こうした御外歩きは秩序を乱し以て帝の権威に触りかねないと、厳しく制し申しなされるので)、いとわづらはしきを(中納言にはとても気苦労だったが)、切に思したることなれば(兵部卿宮が切望なさることなので)、さりげなくともて扱ふも(それらしくなくことを運ぶのも)、わりなくなむ(止むを得ない所です)。

*舟渡りなども所狭ければ(対岸から宇治川を舟で渡って山荘を訪ねるというのも大がかりになるので)、ことことしき御宿りなども、借りたまはず(前回のような立派な源殿の別荘はお借りにならず)、そのわたりいと近き御庄の人の家に(山荘にごく近い中納言の荘園の管理者の家に)、いと忍びて(ごく内密に)、宮をば下ろしたてまつりたまひて(匂宮は御待機して頂きなさって)、おはしぬ(中納言が山荘を訪れなさいました)。　*此処の文意は、注に＜宇治八宮の山荘は川の手前。夕霧の山荘は対岸にあるが、それは利用せずに、その近辺の荘園の管理人の家に泊まって、そこから宇治の姉妹のもとに訪れる計画。＞とある。

見とがめたてまつるべき人もなけれど(匂宮が同道なさっても騒ぎ立てるほどの家人も居ない山荘の手薄さだが)、宿直人はわづかに出でてありくにも(門番が出迎えるだけにしても)、けしき知らせじとなるべし(いつもとは違う気配を気付かれないようにしたようです)。

「例の、中納言殿おはします」とて*経営しあへり(普段通りに、中納言殿がいらっしゃいました、という門番からの知らせを受けて、家人たちもいつも通りの接客準備を間に合わせました)。*「経営」は「けいめい」と読みがあり＜接待し馳走すること。＞と古語辞典にある。「経営」は以前にも使われていた語だが、女房たちが実際に応対することではなく、家司や裏方が部屋の片付けや料理などを用意することを言うのだろう。「しあふ(為敢ふ)」は＜し遂げる。＞と古語辞典にある。間に合わせる、という語感。

君たちなまわづらはしく聞きたまへど(姫君たちは中納言の意向が分からず、その訪問を不安げにお聞きになるが)、「*移ろふ方異に匂はしおきてしかば(移ろふ方異に、という言い方で、

言い寄るなら妹に、と返歌で示唆して置いたのだから、私目当てではないだろう)」と、姫宮思す(と姉君はお思いになります)。　*「移ろふ方ことに」は姫が薫君に返歌した「山姫の染むる心はわかねども移ろふ方や深きなるらむ」(和歌 47-06)に基づいた言い方なのだろう。が、この歌は薫君には、男次第で女はどうにでもなる、という歌意に読めた。また、それは姫の深層心理であったのかも知れない、という作者の暗示でもありそうだが、姫の意図はあくまでも、妹をよろしく、だった。本文はこうした言葉の綾をこの言い回しに込めているのだろうが、言い換え文では言い回しを壊すことになるので、それらの言葉の意味をいちいちヤボったく補語しないと成立しない。つまり、こういう文は意訳以外には言い換えが成立しない。

中の宮は(妹君の方は、実際の一夜の中納言の態度から)、「思ふ方異なめりしかば(意中の人は私ではないようだから)、さりとも(まさか私目当ての筈はない)」と思ひながら(と思うものの)、心憂かりしのちは(騙された形になった彼の一夜の一件以来)、ありしやうに姉宮をも思ひきこえたまはず(かつてのようには姉君を信用申しなさらず)、心おかれてものしたまふ(用心していらっしゃいました)。

何やかやと*御消息のみ聞こえ通ひて(一行は従者が玄関先で何やかやと長々しい御挨拶の口上ばかりを申し上げていて)、いかなるべきことにかと(何かあったのかと)、人びとも心苦しがる(部屋で待ち受け申し上げる女房たちも不思議がります)。　*「おおんせうそこ」は＜動静。様子。状態。＞であり、それを知らせる＜手紙。報告。＞でもあるが、このように実際に訪問した際の「消息」は＜来意を告げること。案内をこうこと。＞と大辞林にあり、であれば、是は玄関先での挨拶の場面ということらしい。また、「聞こえ通ひて」と敬語が無い点についても、来意の口上は従者がした、と読んで置く。

宮をば(その間に中納言は兵部卿宮を)、御馬にて、暗き紛れにおはしまさせたまひて(馬で夜陰の紛れにお引き入れ申し上げなさって)、弁召し出でて(弁を呼び出しなさり)、

「*ここもとに(どうしても)、ただ一言聞こえさすべきことなむはべるを(姫君に一言だけお聞き頂きたい事がございますので)、思し放つさま見たてまつりてしに(姫が私を見放しなさったのをお見受け申し上げましたので)、いと恥づかしけれど(大変気が引けますが)、ひたや籠もりにては(言いそびれていても)、えやむまじきを(気持ちが収まりませんので)、*今しばし更かしてを(少しだけ姉姫と話して夜を更かしてから)、*ありしさまには導きたまひてむや(前回と同じように妹君の部屋内にお手引き下さいませんか)」　*「ここもとに」は＜わたしの方に＞という言い方らしいが、話者が敢えて＜私に言いたい事がある＞と言う時は、この話を＜是非とも、どうしても＞聞いて欲しい、という切実さを表現しているのだろう。　*「今しばし更かしてを」は＜もう少し後で＞という副詞語用ではなく、「えやむまじきを」を受けて＜少しだけ姉姫とお話しして夜を過ごしてから、その後で＞という文意に取らないと、後の話に繋がらなさそうだ。いやに分かり難い文なので少し先読みすると、姫は取り敢えず中納言の話を聞くだけは聞こうと襖戸越しながら直接話し合ったようで、それというのも、中納言の目当てが妹らしいと弁の話から判断したようなので、そのように中納言が話した、という文意になるように考えると、そう取るしかないように思う。　*「ありしさま」は＜以前のように＞という言い方だろうが、具体的には直対面の場を設けるのか、また密かに殿を姫の部屋に入れてしまうのか、が分かり難いので、是も少し先読みすると、弁の理解では、前回と同様に中納言を姫の部屋に入れてしまう、ということだったようだ。また、それが下文の「うらもなく」の意味でもあるらしい。

など、*うらもなく語らひたまへば(などと自分を姫の部屋に入れるようにとの言い難い頼みを相談なさるので)、「*いづ方にも同じことにこそは(遣るだけのことはするが、どうなってもどうせ後はもう当人同士の問題なのだから)」など思ひて参りぬ(などと思って弁は姫の御部屋に参上します)。　*「うらなし」は＜腹蔵がない。下心が無い。＞という語用が多いようだが、この場面では明らかに薫君には隠し事が有るのであり、この「うらもなく」は女の寝所に忍び込む手引きという言い難い頼みをそれとなく遠回しにではなく＜具体的にはっきりと＞口にした、という意味に取って置く。　*「いづ方にも同じことにこそは」は＜どちらの姫が中納言と結婚しても、この家が源氏殿の御身内として御世話頂けることに違いはない＞という言い方ではありそうだ。が、弁がそう思うということは、自分は立場上も物の道理からも殿を手引きするが、あとは姫君たち自身にどちらが結婚するのかは任せよう、と考えたのだろうし、もっと言えば、前回は姉が妹と入れ替わったように中納言から聞かされていて、それで中納言が機嫌が悪かったことも弁は知っているので、姫に一応は話を通すが、どうなっても後は当人たちの問題で弁に責任はないし、知ったことじゃない、というくらいの投げ遣りな気分さえ感じられる文だ。

[第三段　薫、中の君を匂宮にと企む]

「さなむ」と聞こゆれば(弁が姫君に中納言殿の御話を、こういう次第ですとお伝え申し上げると)、「さればよ(そのように妹とまたお会い申したいと仰せなら)、思ひ移りにけり(殿は気が変わったらしい)」と、うれしくて心落ちゐて(と姉君は嬉しく気持ちが落ち着いて)、*かの入りたまふべき道にはあらぬ廂の障子を(帳台にお入りになる向きとは違う廂面の襖戸を)、いとよくさして(しっかり施錠して)、対面したまへり(妹君がいらっしゃる帳台に入る前に一言だけという中納言の話を聞くために、そちら側の母屋で面談に応じなさいました)。　*「かの入りたまふべき道」は＜帳台の入口に面した向き＞だろうが、それが東なのか南なのかは判然としない。北は裏で、西は仏間母屋なので寝台入口ではないだろうし、中納言が控えた廂も南か東のどちらかだ。朝の場面などの印象では、寝台は南表で、北側に奥まって配置されていたように思えて、中納言が控えていたのは東廂だったような気はするが、結局ははっきりしない。

「一言聞こえさすべきが(一言申し上げたいが)、また人聞くばかりののしらむは*あやなきを(他の人に聞こえるほど大声で話すようなことではないので)、いささか開けさせたまへ(少し戸を開けて下さい)。いと*いぶせし(とても困ります)」　*「あやなし」は＜筋違い→意に沿わない＞。　*「いぶせし」は＜気が晴れない→不満だ→困る＞。どうやら、「いぶす(燻す)」状態の形容詞らしく、「燻す」は殺菌・殺虫のために密閉空間を煙の揮発成分で満たすことで、結果として保存食の燻製を作れるという、実生活上で重要な技法なので説得力があるのだろう。

と聞こえさせたまへど(と中納言は申し上げなさるが)、

「いとよく聞こえぬべし(とてもよく聞こえています)」

とて、開けたまはず(と言って姫は戸を開けなさいません)。

「今はと移ろひなむを(今後は妹に心変わりをするので)、ただならじとて言ふべきにや(私に一言断ろうというのだろうか)。何かは、例ならぬ対面にもあらず(何も初対面でも無いのだから)、人憎くいらへで(素気無く応対せずに)、*夜も更かさじ(中納言殿が仰ったらしい「今しばし」ほど

も長話で夜を過ごすまでもない)」など思ひて(など姫は思って)、　*「夜も更かさじ」は、薫君が弁に言ったという「今しばし更かしてを」(二段)に反発する気持ち、なのだろう。

かばかりも出でたまへるに(わずかばかり戸口に近付きなさると)、*障子の中より御袖を捉へて引き寄せて(襖戸口から出た姫の袖を中納言が掴んで引き寄せて)、いみじく怨むれば(姫の非情を非常に恨めしがるので)、「いとうたてもあるわざかな(何て厭なことを)。何に聞き入れつらむ(何で耳を寄せてしまったんだろう)」と、悔しくむつかしけれど(と悔やんで困ったが)、「*こしらへて出だしてむ(上手く宥めて妹の所へ行かせよう)」と思して(とお思いになって)、異人と思ひわきたまふまじきさまに(妹を自分同様にお考え下さるようにと)、かすめつつ語らひたまへる心ばへなど(仄めかしながら応答なさる算段など)、いとあはれなり(その気の全く無い中納言の前では、実に健気です)。　*「さうじのなか」は＜襖の隙間＞ではなく＜御簾内→母屋側＞のような気がする。「より」は「御袖」の副詞で、「捉ふ」の力点を示す格助詞ではないのだろう。　*「こしらへて出だしてむ」は注に＜大君の心中の思い。薫を中君のほうに行かせようとする。＞とある。中納言が妹に心移りした、ということを前提にしての姫の算段。

宮は(兵部卿宮は)、教へきこえつるままに(中納言がお教え申し上げた通りに)、一夜の戸口に寄りて(前回の夜と同じ寝台入口側の襖戸口の前で)、扇を鳴らしたまへば(合図の扇を打ち鳴らしなさると)、弁も参りて導ききこゆ(弁も参上して戸を開けて引き入れ申し上げます)。さきざきも馴れにける道のしるべ(何度も物慣れているような古女房の道案内を)、をかしと思しつつ入りたまひぬるをも(兵部卿宮が興趣深く思いながら帳台にお入りになったのも)、姫宮は知りたまはで(姉君はお知りにならず)、「こしらへ入れてむ(中納言を宥めて帳台に入らせよう)」と思したり(とお思いなのでした)。

をかしくもいとほしくもおぼえて(中納言はそんな姫君が可愛くも愛しくも思えて)、うちうちに心も知らざりける恨みおかれむも(内情を知らないのでは恨みに思われるのも)、罪さりどころなき心地すべければ(罪を逃れられない気がするので)、

「宮の*慕ひたまひつれば(兵部卿宮が私についていらっしゃって)、え聞こえいなびで(とてもお断りできませんので)、*ここにおはしつる(この廂間にまで来ていらっしゃいました)。　*「したふ」は＜恋しく思う＞という語用もあるが、基本的には＜後を追う←下に回る＞という言い方のようだ。姫を＜恋い慕う＞のなら「慕ひ奉り給ふ」になりそうだし、此処では薫君に＜付随する＞ということらしい。　*「ここ」は＜この宇治山荘＞ではなく、正に＜この場、同じ廂間＞という臨場感のある言い方のようだ。

音もせで*こそ、紛れたまひぬれ(で今しがた、音も立てずに寝台側の廂に移りなさって、寝所に紛れ込みなさいました)。　*「こそ」は説明口調で、「まぎれたまひぬれ」の已然形は係り結びの文型となる言い方だが、此処ではいかにも＜だから、もう騒いでも仕方ありません＞と因果を含める語感だ。そしてまた、この「こそ」の強調意は、「ここにおはしつる」を受けるので＜そして今＞を含意する即時性のある文脈かと思う。

*このさかしだつめる人や(さすがの抜かりなさそうな古女房も)、*語らはれたてまつりぬらむ(騙され申したようだ)。　*「このさかしだつめる人や」は注に＜利口ぶった女房。弁をさす。＞とある。「や」は感嘆詞で、さすがの「このさかしだつめる人」にしてからが、という軽口口調。　*「かたる」は＜騙す＞。「たてま

つる」は弁の匂宮に対する尊敬語。騙したのは薫君だが、匂宮が騙した、という言い方をしている。この冗談めいた言い回しで、姫にも首謀者が中納言自身だと気付くだろうし、この計画全体の中納言の考え方を姫に気付かせようとした言い方、でもあるのだろう。

*中空に人笑へにもなりはべりぬべきかな(私たちはあぶれもの同士で、笑われてしまいそうですね)」　*「なかぞら」は＜どっちつかずで中途半端＞。注には＜大君には嫌われ、中君は匂宮に取られて、中途半端で世間の物笑いになってしまいそうだ、の意。＞とある。この文は薫君が主語ではありそうだが、匂宮と妹君に出し抜かれた格好になっているのは、薫君だけでなく姉君も一緒、という心算で薫君は言ったような気がする。いや勿論、薫君は自作自演なわけだが、形の上では余った二人を演出できているので、どうせなら、姫に似たもの同士の共感を期待する事も計算済みだろう。

とのたまふに(と仰ると)、今すこし思ひよらぬことの(姫は其処まで思い付かなかったので)、目もあやに心づきなくなりて(目も暗むほど不愉快で)、

「かく、よろづにめづらかなりける御心のほども知らで(此処まで綿密に策略を張り巡らしていた中納言殿の企てとは知らず)、言ふかひなき心幼さも見えたてまつりにける*おこたりに(他愛も無い未熟さで自分に都合よく殿の言葉を受け止め申して私が誤解すると)、思しあなづるにこそは(思って見くびっていらっしゃったのだ)」　*「おこたり」は＜過ち。間違い。＞という名詞だが、「おこたる(間違える)」の連用名詞と見れば＜間違えること＞であり、「おこたりに思ふ」は＜間違えると思う＞という言い方、かと思う。であれば、その「間違える」は＜姫が殿の言葉を誤解する＞ということになりそうだ。この「おこたり」を一般名詞と取ると、その「姫の過ち」は＜前回の身代わり＞のようにも見えて来て紛らわしい。

と、言はむ方なく思ひたまへり(と力無く後悔なさっていました)。

[第四段　薫、大君の寝所に迫る]

「今は言ふかひなし(もう弁解できません)。ことわりは、返すがへす聞こえさせてもあまりあらば、抓みもひねらせたまへ(お詫びは何度申し上げても言い尽くせませんので抓るでも捻るでも為さってください)。

*やむごとなき方に思しよるめるを(妹君は最高位の方が意中でいらっしゃるようで)、宿世などいふめるもの(私とのご縁など)、さらに心にかなはぬものにはべるめれば(全く考えられないもののようでございますので)、かの御心ざしは異にはべりけるを(そのように御意向が違う方を)、いとほしく思ひたまふるに(お慕い申し上げましても)、かなはぬ身こそ、置き所なく心憂くはべりけれ(適わぬこの身が遣る瀬無く情けないので)。　*「やむごとなき方」は実質で＜王族＞を意味している語用のようだ。尤も、この言い方自体は一般的な語用で特別な意図は無いのかもしれないが、「思しよるめるを」という言い方の方に、そのことにこだわる薫君自身の意識の強さが感じられる。王家に対する臣下身分は、一度それを劣等感と意識したら、絶対に克服できない負い目だ。薫君にその意識はやはりあるのだろう。そんな特別な王族意識を、匂宮は中央に近い生活環境なので当然に持つだろうが、この宇治姉妹が持っているとは思えないが、妹君が匂宮と屈託無く歌の贈答をするだけで、薫君には差を付けられたかの敗北感があった、とは想像し得るところだ。確かに、姉君の方には、匂宮を別世界の人と思う気持ちが強いような印象があり、薫君はこの言い方で姉君の共感を得ようとしたような感覚も、何処かにあるのかも知れない。

なほ(もう私との仲を)、いかがはせむに思し弱りね(受け入れるしか無いと強情を曲げて下さい)。この御障子の固めばかり(この襖戸の錠のように)、いと強きも(固く私を拒もうという強情を張っても)、まことにもの清く推し量りきこゆる人もはべらじ(本当に私たちに情事が無いと思い込み申す人も居ないでしょう)。*しるべと誘ひたまへる人の御心にも(私を案内人に急き立てなさった兵部卿宮のお考えでも)、まさにかく胸ふたがりて(まさか私たちがこのような心の晴れない思いで)、明かすらむとは(夜を明かそうとは)、思しなむや(思っていらっしゃらないでしょう)」　*「しるべと誘ひたまへる人の御心にも」は注に＜私を案内人に誘った方、匂宮の御心中。＞とある。薫君が是を言う意図は何辺にあるのか。匂宮は、姉の不幸を踏み台にしてまで、妹を抱こうという心算ではない。自分も匂宮も、姉妹ともども幸せになりたいと思って来ているのだから、あなたも妹を祝う意味でも私を受け入れるべきだ、という説得なのだろうか。もっと単純に、此処で騒いで匂宮と妹君の情事に水を差すつもりなのか、と制しているのだろうか。下文から逆推すると、薫君が姉に迫っている言葉のようだが、もうひとつ分かり難い。

とて(といって中納言が)、障子をも引き破りつべきけしきなれば(襖を引き破りそうな気配なので)、言はむ方なく心づきなけれど(言いようもなく不安だが)、こしらへむと思ひしづめて(殿を宥めようと姫は冷静に)、

「こののたまふ筋(今仰るお話しの)、宿世といふらむ方は(ご縁という事に付いては)、目にも見えぬことにて、いかにもいかにも思ひたどられず(目に見えないことなのでどうともはっきり分かりかねまして)、*知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ(不安で心細い限りです)。　*「知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ」は注に＜『弄花抄』は「行先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり」（後撰集、離別羇旅、一三三四、源済）を指摘。＞とある。しかし、客観的には宇治姉妹は中納言の援助に頼っているのだから、「宿世といふらむ方は」現に有るのであり、その中納言に袖を掴まれているのが今の窮地そのものだというのに、それを言い回し一つで言い逃れる事が出来るとしたら、この引歌は相当に強い影響力を当時持っていた、ということになりそうだ。つまり、言い換え文の論筋には説得力が無く、「知らぬ涙」と語用した本文の言い回しの妙こそに大喜利の巧みさがあって、その機転を愛でて許す、みたいなことだろうから、その意味では言い換え文は成立しない、という困った文だ。

こはいかにもてなしたまふぞと(このように袖を引っ張ってどう為さる御心算かと)、夢のやうにあさましきに(夢のような驚きに)、後の世の例に言ひ出づる人もあらば(後世の人が取り上げて)、昔物語などに、をこめきて作り出でたるもののたとひにこそは、なりぬべかめれ(昔話に面白がって作り上げる見本になるかと、思えます)。

かく思し構ふる心のほどをも(このように計画なさったあなた様のお気持ちも、私の了解づくでは無く、あなたが袖を掴んで私を離さない強引さで成り立っているという、この実態をお知りになれば、むしろ兵部卿宮も)、*いかなりけるとかは推し量りたまはむ(どうしてそうしたのか分からないとお考えになるでしょう)。　*「いかなりけるとかは推し量りたまはむ」は敬語遣いからして主語は匂宮らしい。「いかなりけると」は＜どういうことだったのかと＞。「かは」は疑義。分かり難い文だが、是は多分、薫君が、匂宮も姉君を変に思う、と言ったことに対して、姫は、兵部卿宮はあなたの方こそを変に思う、と言い返した文意かと思い、実態認識が違う、ということを論旨と見て、左様補語する。

なほ(もう)、いとかく(今の私は)、おどろおどろしく心憂く(死にそうなほど苦しく)、な*取り集め惑はしたまひそ(これ以上は追い詰めて困らせなさいますな)。*心より外にながらへば(それでも何とか生き永らえました後には)、すこし思ひのどまりて聞こえむ(少しは落ち着いてお話し致します)。　*「とりあつむ」は＜取りまとめる、いくつも重ねる＞だから、薫君がいろいろと手の込んだ計略をめぐらしたことを言うようにも思ったが、下文へのつながりを見ると、これ以上＜罪を重ねる←追い詰める＞と読んだ方が文脈が通りそうだ。　*「心より外にながらへば」は注に＜仮定構文。『集成』は「心ならずも生き永らえていましたら。今宵の出来事のあまりの悲しさに死にそうですが、の含意」と注す。＞とある。ということは、今は死にそうだ、という状態を前提にした言い方なのだろうか。他に解も見当たらないので、そうだとすると、上の「いとかく」が＜これほどに、こんなにも＞という一般副詞語用ではなく、この場の今の状況を示す具体意を持った＜今の私は＞という言い方となって、「おどろおどろしく心憂く」が＜異様で恐ろしく＞という一般形容ではなく＜死にそうなほど苦しく＞という言い方だったことになりそうだ。

心地もさらにかきくらすやうにて(今はもう気を失いそうで)、いと悩ましきを(とても気分が悪く)、ここにうち休まむ(此処で横になります)。許したまへ(袖を放して下さい)」

と、いみじくわびたまへば(と懇願なさると)、さすがにことわりをいとよくのたまふが(それなりに筋を立てて仰るのが)、心恥づかしくらうたくおぼえて(立派で健気に思えて)、

「あが君(ああ、愛しい人よ)、御心に従ふことのたぐひなければこそ(あなたが連れないばかりに)、かくまでかたくなしくなりはべれ(こんな無茶をしているんです)。言ひ知らず憎く疎ましきものに思しなすめれば(それでも、これがいっそう言葉も無いほど嫌って遠ざけたいとお思いになるなら)、聞こえむ方なし(仕方がありません)。いとど世に跡とむべくなむおぼえぬ(いっそ死んでしまいたい気持ちです)」とて(と言って)、

「さらば(それでは)、隔てながらも(襖越しながらも)、聞こえさせむ(申し上げます)。ひたぶるに(決して)、なうち捨てさせたまひそ(逃げ去りなさいますな)」

とて(と言って中納言が)、許したてまつりたまへれば(姫の袖を放し申しなさると)、這ひ入りて(姫は後ずさり為さって)、さすがに、入りも果てたまはぬを(それでも逃げ去りなさらないのを)、いとあはれと思ひて(とても感じ入って中納言は)、

「かばかりの御けはひを慰めにて(そこにいらっしゃる御気配を慰めとして)、明かしはべらむ(私も此処でこのまま夜を明かします)。ゆめ、ゆめ(決して無茶はしません)」

と聞こえて、うちもまどろまず(と申して少しも眠りません)、いとどしき水の音に目も覚めて(秋の長雨に水かさも増した宇治川の大きな流れの音に目も覚めて)、*夜半のあらしに(夜の嵐に意外にも)、*山鳥の心地して(山鳥のように独り寝をする気分で)、明かしかねたまふ(夜を明かし難そうになさっていました)。　*「よはのあらしに」は＜《「明日ありと思ふ心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものかは」〈親鸞上人絵詞伝〉による》一夜で桜花を散らす嵐。気づかないうちに変化が起こるたとえ。＞と大辞泉にある。　*「やまどりの」は枕詞で＜山鳥は雌雄が峰を隔てて別々に寝るといわれたところから、「ひとり寝(ぬ)」にかかる。＞または＜山鳥の尾の意で、「尾」と同音を含む「尾上(をのへ)」や似た音を含む「おのれ」「おのづから」などにかかる。＞と大辞泉にある。

［第五段　薫、再び実事なく夜を明かす］

*例の、明け行くけはひに、鐘の声など聞こゆ(いつもと変わらず何事も無かったように明け行く宇治山荘の気配に山寺の鐘の声が聞こえます)。「いぎたなくて出でたまふべきけしきもなきよ(匂宮は寝坊してお帰りになる様子も無いな)」と、*心やましく(と薫君が妬んで不服そうに)、声づくりたまふも(咳払いなさるのも)、*げにあやしきわざなり(自分の計画が上首尾だったのだから、実に妙な具合です)。　*「れいの」は注に＜『完訳』は「「例の」と、実事なき逢瀬が、習慣的に繰り返される気持」と注す。＞とある。「習慣的」と言っても、最初の二人きりの夜に情事が無かった事と、次に妹が身代わりで情事が無かった事と、今回の情事が無かった事とは、それぞれずいぶん意味が違う。何と言っても最初の夜に薫君が強引に姫を抱かなかった事が決定的な失敗だが、薫君はその失敗に未だに気付いていないし、先ず気付くことはないであろうというすれ違いが、この設定のほとんど主題のようなものかと思う。むしろ、この「例の」は、淡々として見える日常の中で確実に意味が変わってくる事態の変化、みたいなものを表現する言い方、または、軽い冷やかしや皮肉口調の言い回しに聞こえる。　*「心やまし」は＜いらだたしい。おもしろくない。＞と大辞林にある。訳文には＜妬ましい＞とある。また、注には＜『完訳』は「薫の心中。思いを遂げえなかった薫は、中の君と結ばれて眠りほうけている匂宮が腹立たしい」と注す。＞とある。　*「げにあやしきわざなり」は注に＜『全集』は「語り手の薫に対するからかい」。『集成』は「草子地」。『完訳』は「自らの案内なのに、匂宮の成功に不機嫌とは妙。語り手の評」と注す。＞とある。

「しるべせし我やかへりて惑ふべき、心もゆかぬ明けぐれの道　(和歌 47-09)

「馴れた心算で迷うのは、暗い夜道に限らない　(意訳 47-09)

*注に＜薫の詠歌。『花鳥余情』は「明けぐれの空にぞ我はまよひぬる思ふ心のゆかぬまにまに」(拾遺集恋二、七三六、源順)を指摘。＞とある。「明けぐれの」「まどふ」「心も行かぬ」と重ねては、よくも見習ったもんだが、こういうのも本歌取りっていうんだろうか。でも、当歌のほうが洒落ているように思う。やはり、「しるべせし我やかへりて」は良い振りだ。難局を笑い飛ばすが芸の道、なんてね。

かかる例、世にありけむや(こんな話は他にあるかなあ)」

とのたまへば(と薫君がのたまうと)、

「かたがたにくらす心を思ひやれ、人やりならぬ道に惑はば」(和歌 47-10)

「どうせ勝手に迷うなら、巻き込まないで欲しかった」(意訳 47-10)

*注に＜大君の返歌。「くれ」「まどふ」の語句を用いて返す。「かたがた」は自分と妹中君をさす。＞とある。

と、ほのかにのたまふを(と姫がそっと仰るのを)、いと飽かぬ心地すれば(薫君はとても不満に思ったので)、

「いかに(何とも)、こよなく隔たりてはべるめれば(すっかり遠ざけられてしまったようで)、いとわりなうこそ(まったく情けない)」

など、よろづに怨みつつ(などとすべてに不機嫌でいると)、ほのぼのと明けゆくほどに、昨夜の方より出でたまふなり(薄っすらと明けて行く時分に、匂宮は昨夜の戸口から寝所を出て行きなさったようです)。いとやはらかに振る舞ひなしたまへる匂ひなど(匂宮がとても優雅に振舞いなさる香りの)、艶なる御心げさうには(いかにも色事めかした御心配りにあっては)、*言ひ知らずしめたまへり(薫中納言らしからず香を焚き染めていらっしゃっていたのです)。ねび人どもは(古女房たちも)、いとあやしく心得がたく思ひ惑はれけれど(とても変で腑に落ちず訝しがったが)、「さりとも悪しざまなる御心あらむやは(とにかく悪いようには為さるまい)」と慰めたり(と楽観していました)。　*「言ひ知らず」は＜曰く言い難く、何といって言いか分からないほど＞という一般形容の副詞語用が多いが、此処の文意は＜言い方が分からない←異質に感じる＞ということではないか。というのも、この時点では、女房たちは事情を知らず、妹君と同衾したのは薫中納言だと思っていたはずで、であれば、薫君は香を焚き染めないので、香を強く焚き染めた男を女房たちは変に思った、という意味に取って置く。

暗きほどにと、急ぎ帰りたまふ(人目を避けるべく、御一行は暗い内にと急いでお帰りになります)。道のほども(道の距離も)、帰るさはいとはるけく思されて(帰り道はとても遠く思われて)、心安くもえ*行き通はざらむことの(今後も気安く行き来できなさそうなのが)、かねていと苦しきを(今から前以て懸念されて)、「*夜をや隔てむ(若妻と夜を別にしたくないのに)」と思ひ悩みたまふなめり(と匂宮は思い悩んでいらっしゃるようです)。　*「行き通はざらむ」の「む」は未来予測の助動詞で＜今後行き来できないだろう＞。したがって、「かねて」は＜前以て＞だが、此処で言う今後に対する以前とは＜今＞を意味する、ことになるらしい。　*「夜をや隔てむ」は注に＜『源氏釈』は「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」（古今六帖五、一夜隔てたる）を指摘。＞とある。「まきそむ」は「枕き初む」と表記され＜枕を共にし始める＞という言い方らしい。歌筋は＜若い新妻と枕を共にし始めてからは夜を別に過ごすことはない憎くないのだから＞という素直な惚気らしい。

まだ人騒がしからぬ朝のほどにおはし着きぬ(まだ人が騒ぎ立てない朝の内に六条院に帰り着き為さいました)。廊に御車寄せて降りたまふ(匂宮は中門廊に御車を寄せ付けてお降りになります)。異やうなる女車のさまして隠ろへ入りたまふに(わざとらしく女車に見せかけて隠れて邸にお入りになると)、*皆笑ひたまひて(お二人共に思わず揃ってお笑いになって)、　*「みな」は注に＜匂宮と薫をさす。＞とある。敬語遣いからして、その二人共という意味かと思うが、この「みな」は＜その場の一同が思わず揃って＞という語感なのだろう。

「おろかならぬ宮仕への御心ざしとなむ思ひたまふる(今回のそなたの働きは、熱心なお勤めの御心構えと存じ上げます)」

と申したまふ(と匂宮は冗談を申されます)。しるべのをこがましさも(道案内の道化ぶりも)、いと妬くて(あまりに馬鹿らしくて)、*愁へもきこえたまはず(薫君は自分と姉君との不首尾は申し上げなさいませんでした)。　*「うれへ」は＜憂い。嘆き。悲しみ。＞で、薫君の姉君との不首尾のことなのだろう。

［第六段　匂宮、中の君へ後朝の文を書く］

宮は、*いつしかと御文たてまつりたまふ（匂宮は早々に後朝の御手紙を妹君に差し上げなさいます）。　*「いつしか」は現代語では＜いつの間にか＞だが、古語では＜早々に←何時ということも無しに＞でもあるらしい。

山里には、*誰も誰もうつつの心地したまはず、思ひ乱れたまへり（宇治山荘では姉君も妹君もそれぞれの事情で、昨夜の事が本当にあったことのような気がなさらず混乱なさっていました）。*「たれもたれも」は敬語遣いからして姉と妹を指すが、御姉妹と言わないのはそれぞれの思惑が違うことを示しているのだろうか。

「さまざまに思し構へけるを（いろいろ企てなさっていたのに）、色にも出だしたまはざりけるよ（知らぬ顔をなさって）」と、疎ましくつらく（と妹君は警戒し恨んで）、姉宮をば思ひきこえたまひて（姉君を思い申しなさって）、目も見合はせたてまつりたまはず（目も合わせなさいません）。知らざりしさまをも（姉君も中納言の計略を知らなかったということを）、さはさはとは、えあきらめたまはで（それはそれとはっきりとは説明できなさらず）、ことわりに心苦しく思ひきこえたまふ（妹の疑念も当然と気まずく思い申しなさいます）。

人びとも（女房たちも兵部卿宮からの御情文ということで）、「*いかにはべりしことにか」など、御けしき見たてまつれど（昨夜はどういうことになったのでしょうかと妹君の御様子を伺い申し上げるが）、*思しほれたるやうにて（お部屋には呆然となさったようにして）、*頼もし人のおはすれば（頼りの姉君がいらっしゃるので）、「あやしきわざかな（変ですねえ）」と思ひあへり（と思い合っていました）。　*「いかにはべりしことにか」は、匂宮から妹君への手紙があったことで女房たちが昨夜の異変に気付き始めた、という意味に取って置く。　*「思しほれたるやうにて」の主語は姉なのか妹なのか分からない。一応、姉と見て置く。　*「頼もし人」は注に＜女房たちが頼りとする人、大君。＞とある。事情が分かっている筈の姉君が呆然としていて、女房たちには事情が分からない、という文意に取って置く。が、本来は姉は妹にとっても「頼もし人」だろうし、全体に分かり難い文だ。

御文もひき解きて見せたてまつりたまへど（姉君は妹君に兵部卿宮からの御手紙を、このように書かれてあるので御返事申さねばならないと、引き開いてお見せ申し上げなさるが）、さらに起き上がりたまはねば（妹君は一向に起き上がりなさらないので）、「いと久しくなりぬ（お急ぎください）」と御使わびけり（と御使者が催促申します）。

「世の常に思ひやすらむ、露深き道の笹原分けて来つるも」（和歌 47-11）

「世の常に 思う深さの 露と笹」（意訳 47-11）

*注に＜匂宮から中君への贈歌。『完訳』は「霧ふかき--」に恋の苦衷を訴える。後朝の歌の常套的表現」と注す。＞とある。「思ひやすらむ」の「や」は反語ではなく疑問の係助詞。「世の常」は＜平常。普通。＞でもあり、普通に情事を交わした＜男女の仲＞でもあるのだろう。また、「笹原」だが、笹－竹－藪で、彼岸明けに宇治を訪れた、という時節柄に、後の藪入りを掛けた洒落言葉になっているのだろうか。それとも単に、実際に笹原を抜けて通ったというだけのことだろうか。

書き馴れたまへる墨つきなどの(御手紙を多く書き慣れていらっしゃる兵部卿宮の御筆跡が)、ことさらに艶なるも(特に優美なのも)、*おほかたにつけて見たまひしは(以前に風情ごととして御覧になっていた時は)、をかしくおぼえしを(興趣を覚えたが)、*うしろめたくもの思はしくて(今は全体に何となく不審に思われて)、*我さかし人にて聞こえむも(自分が訳知り顔で代返申すのも)、いとつつましければ(とても気が引けたので)、まめやかに(事細やかに)、あるべきやうを(書くべき文面を)、*いみじくせめて書かせたてまつりたまふ(姉君は妹君に詳しい事情を聞きだして書かせて差し上げなさいました)。　*「おほかたにつけて見たまひしは」は注に＜主語は大君。過去の助動詞「し」、かつて妹の中君に対して贈られてきた手紙も一般のお付き合いとして御覧になっていた時は、の意。＞とある。　*「うしろめたし」は＜気が咎める。引け目に思う。気後れする。不安だ。＞でもあるが、此処では「もの思はし」とあるので姫自身が引け目を感じている、という文意ではなく、姫はこの事態全体が実際によく分かっていなかっただろうし、不審だったのだろう。　*「我さかし人にて聞こえむ」は注に＜こうした後朝の文への返書の作法を教えるのは、母親や乳母の役。＞とある。ただ、「聞こえむ」は＜妹に教える＞のではなく＜自分が代返する＞ということのようだ。姫は事情を承知していないので自分が分かったように代返することは出来ないが、作法は姉として弁などから仕込まれていたのか、それに則って妹から事情を聞きながら妹自身に返事を書かせた、という文意らしい。　*「いみじく責む」は一般的な言い方としては＜厳しく咎める＞とか＜強く催促する、強要する＞とかを意味するようだが、此処の文意は恐らくは「まめやかに」「いみじくせめて」「あるべきやうを」「書かせたてまつりたまふ」という事情を、意味を先に動作を後にとまとめて語っていて、姉が妹に此処で当夜の閨での詳しい事情を聞き出した、と取って置きたい。なお、この返書や返歌については此処では触れられていないが、後で紹介されるのだろうか。それとも、このままなのだろうか。変な感じだ。

*紫苑色の*細長一襲に、*三重襲の袴*具して*賜ふ(姫君はこの御使者を正式な婚儀の使者と見立てて、褒美の品をお与えなさいます)。　*「しをにいろ」は藤紫ともいう明るい紫色のようだ。「紫苑(しをん)」は＜キク科の多年草。山間の草地に自生し、高さ1.5～2メートル。根際に大きな葉が群生。秋、多数の淡紫色の花を開く。漢方で根を乾かしてせき止めの薬にする。栽培もされる。鬼の醜草(しこぐさ)。《季 秋》＞と大辞泉にある。　*「ほそながひとがさね」は細長上着の女物装束一揃い、なのだろうが、良く分からない。　*「みへがさねのはかま」は三重仕立てらしく、冬物の防寒衣かも知れない。　*「具して」は＜添えて＞。　*「たまふ」は注に＜大君方から婚儀の労を果たした使者への禄。大君は中君と匂宮の正式な結婚として扱う。＞とある。こうした文意は私には本当に当時の作法の素養が無いので、注釈無しには汲み取れない。

御使苦しげに思ひたれば、包ませて、供なる人になむ贈らせたまふ(御使者がこの褒美を受け取り難そうにしていたので、姫は包ませて供人に持たせなさいます)。

*ことことしき御使にもあらず(この文遣いは正式な婚儀の御使者ではなく)、例たてまつれたまふ上童なり(普段の文遣いの用足しを仕えまつる殿上童なのでした)。ことさらに、人にけしき漏らさじと思しければ(匂宮は今日の所はまだ内々に話を進める心算でこの文遣いを使いに出しなさって、表立っては余人に婚儀の気配を漏らさないようにお考えだったので)、「*昨夜のさかしがりし老い人のしわざなりけり(こうした表立った返礼は昨夜の訳知り顔の古女房の仕業なのだろう)」と、ものしくなむ、聞こしめしける(と不都合なことのように報告をお聞きになったようです)。　*「ことことしき御使にもあらず」は注に＜匂宮の心中の思い。内密に考えていた。正式な結婚とは思っていなかった。＞とある。「正式な結婚とは思っていなかった」のかどうかは難しいところだが、少なくも匂宮はこの文遣いを正式な使者とは考えていなかったらしい。　*「よべのさかしがりし～」は注に＜匂宮の心中の思い。大

君のしわざとは知らない。＞とある。詳しく語られていないので推測に苦労するが、どうも匂宮の認識では、姉君は匂宮が内密に妹君の寝所に忍び込むことを了解していた、ということらしく、それは、そのように匂宮が薫君から事情説明を聞かされていた、ということなのだろう。また、此処までに匂宮と妹君の閨での場面が語られておらず、其方の仲の事情は分からず、ましてやその展開も先が読めず、読者としては不当に目隠しされたまま話が進むので、その逐一に文意が非常に取りずらい状態が続いている。

［第七段　匂宮と中の君、結婚第二夜］

*その夜も（その夜も匂宮は薫君を）、かのしるべ誘ひたまへど（宇治への案内人に誘いなさったが）、「冷泉院にかならずさぶらふべきことはべれば（冷泉院に必ずお仕えするべき用がございますので）」とて（と言って薫君は）、とまりたまひぬ（都に留まりなさいました）。「例の、ことに触れて（例によって何かと）、すさまじげに世をもてなす（興醒めなことをする）」と、憎く思す（と匂宮は薫君を不満にお思いになります）。　*「そのよるも」は注に＜次の夜。結婚第二夜に当たる。匂宮は薫を誘う。＞とある。宇治の姫君の方でも、正式な婚儀を認めた形になった以上は、匂宮はもう公然と、とはいえ皇太子ではないものの今上帝の御子なれば、やはり大事に成らない様に人目は避けるのだろうが、姫と妹君に対しては隠れること無く、三日間の初夜通いをすることになるようだが、それにしては宇治は遠く、親王が微行ということで済むものなのだろうか。その辺の事が言及されていないようで、しかし匂宮は宇治へ通うようで、非常に不思議な感じがする。

「*いかがはせむ（どうしたものか）。本意ならざりしこととて（私の思惑とは違って、それも中納言の暴力的な策略で、妹は兵部卿宮と結ばれなさったが）、おろかにやは（しかし高貴な御相手であり決して粗略には応対申せない）」と思ひ弱りたまひて（と姉君は困りなさって）、御しつらひなどうちあはぬ住み処なれど（御部屋飾りなど間に合わない山小屋ながら）、さる方にをかしくしなして待ちきこえたまひけり（それなりに風情あるように模様付けして兵部卿宮をお待ち申し上げていらっしゃいました）。　*「いかがはせむ」は注に＜以下「おろかにやは」まで、大君の心中。反語表現。＞とある。文意からして、この校訂には従いたい。が、匂宮を語る上文から、何の前置説明も無しに、行き成り「いかがはせむ」で宇治の姉君の内心文に場面転換するという言葉足らずは、脱稿が無いとしたら作者の場面作文構成力を強く疑う。

はるかなる御中道を（都からの遠い御道中を）、急ぎおはしましたりけるも（兵部卿宮が急いでお越し下さいましたのも）、うれしきわざなるぞ（嬉しいというのは）、かつはあやしき（疑念の残る成り行きながらも、一方では慶事であるというほろ苦さです）。

正身は（妹君ご本人は）、我にもあらぬさまにて（呆然とした様子で）、つくろはれたてまつりたまふままに（新妻装束を着付け申されなさるままに）、*濃き御衣のいたく濡るれば（その赤い御着物の袖が涙で濡れているので）、さかし人もうち泣きたまひつつ（世話役の姉君も思わず泣きなさりながら）、　*「こきおんぞ」は注に＜濃い紅色のお召し物の袖。＞とある。

「世の中に久しくもとおぼえはべらねば（父宮亡き後に長くは生き永らえるきがしませんので）、明け暮れのながめにも（日々思うのは）、ただ御ことをのみなむ（ただあなたの将来のお身の上が）、心苦しく思ひきこゆるに（心配申されまして）、この人びとも（女房たちも）、よかるべきさまのこ

とと(今回の婚儀を良縁と)、聞きにくきまで言ひ知らすめれば(聞き苦しいほど誇りを忘れて実利を説き知らせようとしているようで)、

年経たる心どもには(経験豊富な古女房たちには)、さりとも、世のことわりをも知りたらむ(そうはいっても、世の中の道理を知っているだろうし)、はかばかしくもあらぬ心一つを立てて(世間知らずの私一人の判断で)、*かくてのみやは(このまま私ともども独身ではいけないから)、見たてまつらむ(あなたを中納言殿と結婚させ申そう)、と思ひなるやうもありしかど(と思ってみた事もあったが)、　*「かくてのみやは」は注に＜反語表現。こうしてあなたを独身のままにお置き申してよいものか、決してよくはない。そこで、薫の結婚を考えたのだが。＞とある。ということは、姉君が計略した「見たてまつらむ」の身代わり作戦を「はかばかしくもあらぬ心一つを立て」たものだと、姉自身が認めた、という論旨になりそうだ。本気で姉君がそう考えて納得しているかどうかは別にして、妹に対して姫がこう言って非を詫びた、という形には成っていそうだ。

ただ今かく、思ひもあへず(今回このように思いも寄らないことで)、*恥づかしきことどもに乱れ思ふべくは(私たちに起きた身の置き所の無い事柄に動転しようとは)、*さらに思ひかけはべらざりしに(まったく予想外でしたが)、これや、げに(是が正に)、人の言ふめる逃れがたき御契りなりけむ(世に言う逃れ難き御宿命なのでしょう)。　*「はづかし」は＜畏れ入る、恐縮する、遠慮したい、恥ずかしい＞という気持ちだろうが、予期せぬ不都合な事態に対応に窮して＜隠れたい→身の置き所がない＞状態を示しているような気がする。「ことども」は、姉が中納言に袖を捉えられて身動きできなかったことと、妹が兵部卿宮に女にされたこと、を差しているのだろう。姉は、兵部卿宮への返事を妹に書かせる時に、妹から昨夜の閨での様子を、ある程度は聞きだしているはずだ。　*「さらに思ひかけはべらざりしに」は既に釈明はしていただろうが、重ねて身の潔白を主張する姉の言い訳ではありそうだ。ただ、姉の方は妹に、薫君に袖を掴まれたという自身の具体的な経緯はまだ知らせていないのかも知れない。そんな風に聞こえるのが下の文だ。

いとこそ、苦しけれ(あまりの急変で、とても辛いことですが)、すこし思し慰みなむに(少しあなたが落ち着きなさったら)、知らざりしさまをも聞こえむ(私が今回の企てを知らなかったということについてもお話し申します)。憎しと、な思し入りそ(私を憎んでは厭だわ)。罪もぞ得たまふ(罪にお成りよ)」

と、御髪をなでつくろひつつ聞こえたまへば(と妹君の御髪を撫で繕いながら申しなさると)、いらへもしたまはねど(妹君は返事もなさらないが)、さすがに、かく思しのたまふが(そうは言っても姉君がこのように親身に思い仰るのが)、げに、うしろめたく悪しかれとも*思しおきてじを(確かに疚しく悪意あるお考えでもあるまいが)、*人笑へに見苦しきこと添ひて(山育ちの自分が見劣りして、都の人に笑われる見苦しさを圧して)、*見扱はれたてまつらむがいみじさを(結婚して兵部卿宮に御世話をお掛け申し上げることの居た堪れなさを)、よろづに思ひゐたまへり(いろいろと考えていらっしゃったのです)。　*「思しおきてじを」は注に＜打消の助動詞「じ」打消推量の意。お考えであったのではあるまいから、の意。＞とある。さて、この接続助詞「を」だが、是は前にある「げに」と肯定確認を示す副詞を受けているので、此処までは上文の論旨に沿った論理展開ではありそうだが、わざわざ此処である一面に付いて部分的な肯定確認をしたということは、以下の文が上文の論旨に反する別の面の内容である事を導く構文となるので、この「を」は逆接の＜だが＞だろう。　*「人笑へに見苦しきこと」は姉妹の兵部卿宮に対する山育ちの劣等感、と読んで置く。逆に、我を張って独身を通すこと、も相当に見苦しいようにも思ったが、体の

関係を持ってしまった以上は、後は独身を通すとなると出家しか無さそうで、出家を見苦しいとは言い難いだろうし、また文脈からして、此処の文意は姉に従うことを指し示して、それを嫌う、という筋に成らないと通りが悪いことからしても、匂宮との結婚を受け入れる、という筋で読んで置きたい。　*「見扱ふ」は＜世話を見る＞。「見扱はる」は、主語が妹君の受身表現で＜世話される＝世話を掛ける＞。「たてまつる」は妹君の匂宮への謙譲なのだろう。なお、「いみじさを」の「を」は格助詞。

さる心もなく（そのように匂兵部卿宮を受け入れる心構えも無く）、あきれたまへりしけはひだに（その闖入を驚いていらっしゃった昨夜の妹君の姿でさえ）、なべてならずをかしかりしを（並の人とは違って美しかったが）、まいてすこし世の常になよびたまへるは（まして今は少し世馴れなさって淑やかにしていらっしゃるのは）、*御心ざしもまさるに（匂宮の御興趣も増して）、たはやすく通ひたまはざらむ山道のはるけさも（容易には通えない山道の遠さも）、胸痛きまで思して（心痛にまでお思いなさって）、心深げに*語らひ頼めたまへど（心を込めて姫の上京を説いて請いなさるが）、あはれともいかにとも思ひ分きたまはず（妹君はそのお誘いを有難いとも何ともお分かりなさいません）。　*「みこころざしもまさる」は、もしかすると具体的に匂宮の男根勃起を示す言い回しなのかも知れないが、そうだとしても、なるべくこの言い方のままで味わいたい。また、そのように読むと、此処の一文は実に何とも味わい深い。　*「語らひ頼めたまへど」は、「はるけさも胸痛し」という思いを匂宮は妹君に訴えた、に違いない。が、是が濡れ場の描写であると見れば、匂宮の切ない愛撫と熱い挿入にも感じ切れていない妹君、という閨での二人の姿態が窺えて面白い。いや、妹君は不感症なのではなく、この日は緊張のあまり性戯を楽しめなかったのであり、本来は好色だ、という事情説明は下に語られている。

言ひ知らずかしづくものの姫君も（非常に大事に育てられたような姫君であっても）、すこし世の常の人げ近く（もう少し世間付き合いがあり）、親せうとなどいひつつ（親や兄弟などから）、*人のたたずまひをも見馴れたまへるは（妹君も男の暮らしぶりを見慣れなさっていれば）、*ものの恥づかしさも（匂宮に対する気恥ずかしさも）、恐ろしさもなのめにやあらむ（極度の緊張も普通程度のものだったのかもしれません）。　*「人のたたずまひをも見馴れたまへるは」は注に＜男性の行動を見慣れていらっしゃる方は、の意。中君は男の兄弟はなく、父八宮も勤行生活という一般とは変わった生活者であった。＞とある。　*「もの」は＜いちもつ＞の隠語かも知れない。

家にあがめきこゆる人こそなけれ（宇治山荘には気兼ね申すほどの人もいなかったが）、かく山深き御あたりなれば（かくも山深いところなので）、人に遠く（人里離れて）、もの深くてならひたまへる心地に（引き籠もりがちでいらっしゃる妹君に）、思ひかけぬありさまの（考えてもいなかった激しい情事は）、つつましく恥づかしく（はしたなく恥ずかしく）、何ごとも世の人に似ず（自分の所作の全てが都人に劣って）、*あやしく田舎びたらむかし（変に田舎じみているのではないかと）、*はかなき御いらへにても言ひ出でむ方なくつつみたまへり（妹君は思わず出てしまう声すら気後れして我慢していらっしゃいました）。　*「あやしく田舎びたらむかし」は「何ごとも世の人に似ず」共々に妹君の内心文として括弧校訂すべきかと思う。が、それはそれとして、此処で「田舎ぶ」と妹の意識を明かすくらいなら、先に「人笑へに見苦しきこと添ひて」という思わせぶりな言い方をしたのは何故なのか。もしかすると、「人笑へに見苦しきこと」は＜結婚すること＞ではないのだろうか。いや、だがしかし、やはり「見苦しきこと」は＜出家＞より＜結婚＞の方が語意語用法に適うだろうし、此処に至っても全体の文脈破綻はしていないようなので、このまま流す。　*「はかなき御いらへ」は敏感な体を刺激されて反応する喘ぎや呻きや吐息だろうが、こういう場合の「おおん」は妙にイヤラシイ。

さるは(しかし)、この君しもぞ(姉妹ではこの妹君の方こそが)、*らうらうじく*かどある方の匂ひはまさりたまへる(素直で感じやすい素地を持っていらっしゃったのです)。　*「らうらうじ」は＜物慣れている＞という形容のようだが、そうした技量の習得の為に努力する＜素直さ、可愛げ＞でもあるらしい。　*「かど」は＜才能、才気＞でもあるが＜見所、興趣＞とも古語辞典にある。此処は濡れ場なので、「見所」は＜性反応＝感じやすさ＞だろうし、「にほひ」は＜本来の性質＝素地＞だ。

［第八段　匂宮と中の君、結婚第三夜］

「*三日にあたる夜、餅なむ参る(新婚三日目の夜は祝餅を召し上がります)」と人びとの聞こゆれば(と女房たちが申し上げると)、「ことさらにさるべき祝ひのことにこそは(念入りにそういう祝い事はしなければ)」と思して(とお思いになって)、御前にてせさせたまふも(台所ではなく御自室で作らせなさるものの)、たどたどしく(作り方を良く知らず)、かつは大人になりておきてたまふも(にも関わらず親代わりとして指図なさるのも)、人の見るらむこと憚られて(女房たちの目に気が引けて)、面うち赤めておはするさま(顔を赤らめていらっしゃる姉君の姿は)、いとをかしげなり(とても健気です)。このかみ心にや(姉としての思い遣りからか)、のどかに気高きものから(おっとりとして気位の高いものの)、人のためあはれに情け情けしくぞおはしける(妹の為に心から親愛さを見せていらっしゃったのです)。　*「三日にあたる夜」と匂宮が帰った様子も無く語られるので、匂宮は宇治に留まっている、ということか。が、それならそれで、そう語るべきだろうに。

中納言殿より、

「昨夜、参らむと*思たまへしかど(昨夜参上しようと存じましたが)、*宮仕への労も(あなた様へのご奉公も)、しるしなげなる世に(し甲斐の無さそうな私たちの仲に)、思たまへ恨みてなむ(悲しく存じられまして、出そびれ申しました)。　*「おもたまへ」は「思ひ給へ」の音便。「給へ」は丁寧語の補助動詞「給ふ」の下二段活用連用形。　*「宮仕への労もしるしなげなる世に」は注に＜『完訳』は「大君が自分に応じてくれぬ恨みをこめて言う」と注す。「世」は薫と大君の仲。＞とある。

*今宵は雑役もやと思うたまふれど(今宵は祝儀のお手伝いでもと存じられますが)、*宿直所のはしたなげにはべりし乱り心地(先夜の夜明かしを情けなく思う煩いが)、*いとど安からで(少しも良くなりませんで)、やすらはれはべり(休んでおります)」　*「こよひはざふやくもや」は注に＜今夜は匂宮と中君の新婚三日目の夜の儀式のお世話すべきだが、の意。＞とある。「おもうたまふれ」の「思う」は「思ひ」のウ音便。「給ふれ」は丁寧語「給ふ」の已然形だが、「給ふ」自体に受動意がある、かと思う。　*「とのゐどころのはしたなげにはべりし」は注に＜先夜の襖越しで大君と対面して夜を明かしたことをいう。＞とある。　*「いとどやすからでやすらはれはべり」は＜少しも休まらないので休められている＞という矛盾した言い方に聞こえる。「やすからで」の「安し」は＜体調が回復する＞。「やすらはる」の「休らふ」は＜休む→安静にする→動かないでいる→留まる＞。「やす」の＜平穏＞語感を多義に使い回すと、こんな言い回しも出来るという見本みたいな言い方だ。

と、*陸奥紙に*おひつぎ書きたまひて(と陸奥紙にすらすらとあっさりお書きになって)、まうけのものども、こまやかに(祝いの品々を丁重に)、縫ひなどもせざりける(仕立てていない反物を)、いろいろおし巻きなどしつつ(色とりどりに巻き入れて)、*御衣櫃あまた懸籠入れて(衣装箱にそれらの中箱をたくさん隠し荷造りして、取り入りたい本心を隠して)、老い人のもとに(弁

の御許あてに)、「人びとの料に(女房たちの衣服用に)」とて賜へり(とて贈り下されました)。
*「みちのくがみ」は大辞林に＜陸奥産の檀紙(だんし)。また、檀紙の別名。上質の楮(こうぞ)紙ともいう。みちのくにがみ。＞とあり、「檀紙」は＜古くマユミの樹皮で漉(す)いた和紙。真弓(まゆみ)紙。＞であり＜コウゾで漉いた和紙の一。江戸時代以後ちりめん状のしわを特徴とした。紙の大きさとしわの大小によって大高(おおだか)・中高・小高の別がある。包装・文書・表具などに用いられる。陸奥(みちのく)紙。＞とある。また注には、此処の文意を＜恋文には使用しない陸奥紙にきちんと上下を揃えて書いて。恋文は薄様の鳥の子紙にちらし書きにする。＞としてある。　*「おひつぐ」は「追ひ継ぐ(間をあけないで、すぐあとに続ける。続けざまにする。[大辞林])」らしいが、此処の薫君の演出は情緒を排して事務的作業の冷たさを姫君に印象付けようとするものだろうから、無機的に＜あっさりすらすらとする＞という言い方と取って置く。　*「みぞびつ」は＜衣類箱＞。「懸籠(かけご)」は＜箱中箱＞で、本来の品物が隠れることから＜隠し事。下心。＞を意味するらしい。是等を「人びとの料に」として贈る、ということは、薫君は女房たちに、また上手く手引きせよ、と言っている、ということなのだろう。

*宮の御方にさぶらひけるに従ひて(薫中納言は母入道宮の御部屋に控えていたことから)、いと多くもえ取り集めたまはざりけるにやあらむ(あまり多くの祝い品を取り集める事がお出来にならなかったようで)、ただなる絹綾など(生地のままの薄織物などを)、下には入れ隠しつつ(底上げに下敷きにして)、御料とおぼしき二領(姫姉妹への御祝いと思われる御衣装の二揃いを)、いときよらにしたるを(とても美しく納めてあって)、*単衣の御衣の袖に(その下着の御衣服の袖に)、*古代のことなれど(古風な手口だが)、　*「みやのおおんかた」は＜母三条入道宮の御部屋＞だろうが、三条宮邸が焼けてからは、三条宮は六条院の恐らくは春の町母屋西側に住まっていて、薫君の御部屋もその近くにあり、今回の匂宮の結婚の祝い品についても、薫君は母宮に相談した、ということなのだろうか。いくらなんでも、母宮に隠れて用意したから大した物が揃えられなかった、ということではなく、秘密にしていた事が急に表沙汰になったので、入道宮にしても揃えられなかった、ように思うが、どうなんだろう。何れにせよ祝い品を実際に揃えるのは薫君自身ではなく、入道宮付きの女房たちが立ち働くのだろうから、入道宮に隠し通すのは無理だろうし、話が固まった以上は宇治姫は遊びで済む身分の相手ではない。となると、匂宮と宇治妹君との結婚は公然とした話になってくる。であれば、当然に程も無く、匂宮の母君である皇后にも知らされ、父帝にも知らされることになるだろう。であれば作者は、この「宮の御方にさぶらひけるに従ひて」という一文で、局面が大きく変質したことを当時の宮廷読者に十分に知らせることを意図していた、ということなのかも知れない。　*「ひとへ」は＜裏地の無い一枚仕立ての服＞でもあるが、特に＜肌着または下着＞のこととともあり、下歌に掛けた言い回しであれば＜下着＞のことなのだろう。　*「こたいのこと」は、「単衣の御衣の袖に」色紙を置く遣り方が＜古風＞なのか、歌の詠み方自体が＜古風＞なのか、脅し口調のからかいが＜古風＞なのか、特に注も無く、私には分からないが、ともかくは「脅しきこえたまへり」が冗句である事の前振りではありそうだ。

「小夜衣着て馴れきとは言はずとも、かことばかりはかけずしもあらじ」(和歌 47-12)

「寝間着で夜を明かしたら、誰が見たって深い仲」(意訳 47-12)

*注に＜薫から大君への贈歌。「馴れ」「懸け」は「衣」の縁語。『集成』は「大君に近づき、顔まで見たことがあるので、いくらそっけなくなさっても駄目です、とおどす」と注す。＞とある。が、「おどす」とは姉君が、中納言が自分との仲を傍目には結ばれたように見えていると言っていたことを気にして、姉自身が脅されたように受け取った、ということであり、薫君自身は新婚三日目の縁固めの祝歌に三枚目を演じて＜おどけ＞た心算だったのだろう。しかし、そうだとしても、こんな戯れを中納言に言わせてしまうのも、姉は自分が妹を身代わりに立ててしま

ったからだ、と自分を責めるのかも知れない。とはいえ、他ならぬこの祝日に贈るこの歌を、冗談口調の祝言と受け取れずに言葉尻を真に受ける、というのはあまりに時機を心得ない如何にも世慣れていない生活感だ。薫君は実の兄の心算で妹君に戯れたのであり、そうすることで姉姫にも祝意を伝える、という意図だったのだろう。しかし結果として、洒落が通じなかったとすれば、其処を見誤った薫君の失敗作、ということになってしまう。洒落がキツイとも言えそうだし、宇治姫に通じないことくらい分かりそうなものだとも言えそうだし、それでも、是くらいは言いたくなる薫君の立場も心情も尤もにも思える。そういう意味では、とても難しい歌だ。さて、「小夜衣(さよごろも)」は＜夜着、寝巻＞。「馴る」は＜慣れる、親しむ＞であり、衣服については＜着慣れる、着古す＞また＜糊が落ちて生地が柔らかくなる＞という言い方でもあるらしい。上句は＜衣を着古す＞という日常の言い方を真似て＜夜着を着て親しくなった仲とは言わないが＞と言った古典的？な洒落語用の詠み方、なんだろうか。で、「懸く」は＜関係する、関わる＞という広い意味があり、言葉については＜口にする、口に出す＞となり、布なら＜覆い掛ける＞、紐などは＜巻く＞とか、そうすることで＜印を付ける＞とか、場面に応じて具体意は変わる。「かこと」は＜口実、言い訳＞の場合もあるが、此処では振られたことに対する＜恨み言、不平＞というか、むしろ自嘲気味な＜愚痴＞の心算なのだろう。また、「かことばかり」は＜申し訳程度、ほんの少し＞だから、下句は＜少しは文句が言いたい＞であり＜まったく縁が無いでもない＞でもある。

と、*脅しきこえたまへり(と脅しつけて見せ申しなさいました)。　*「おどす」は＜「怖づ」とす＝怖がるようにする＞だろうか。ただ、此処では「古代のことなれど」と言割ってあるとすれば、わざとそのように＜演じて見せた＞という文意だ。

*こなたかなた(姉君も妹君も)、ゆかしげなき御ことを(中納言が言い掛かりを付けた殿御に顔を見られた地金の御立場を)、恥づかしくいとど見たまひて(ますます恥ずかしくお思いになって)、御返りにもいかがは聞こえむと思しわづらふほど(御返事をどうしたものかと思い悩んでいらっしゃる内に)、*御使ひかたへは(御使者の半分は)、逃げ隠れにけり(悪戯である事を示す為に逃げ隠れていたので)、あやしき下人を*ひかへてぞ(事情を知らない下位の従者を引き止めて)、御返り賜ふ(御返事をお与えなさいます)。　*「こなたかなたゆかしげなき御ことを」は注に＜大君と中君二人とも薫に姿を見られてしまって、奥ゆかしいところがなくなってしまったこと。＞とある。手品の仕掛けはチマチマした話のようでも、それでも優れた演出には人を引きつける魔力があり、其処に商品価値がある以上は、その仕掛けの秘匿にも、その利益を得る立場にある人にとっては命を懸ける価値がある、ということになるのだろう。永久就職できるかも知れない顧客に顔見世だけで終わってしまったのでは、結果として安売りしてしまったことになる、という見方は如何にも商業主義の女郎部屋のようだが、演劇の面白さは人を魅了して止まない、と見れば興味本位を生活信条とするヒトという生命体の本質の表れとも言えそうだ。　*「おおんつかひかたへはにげかくれにけり」は注に＜『集成』は「お使いのうち何人かは、逃げて姿を隠してしまった。「かたへ」は、一部分。禄（労をねぎらって与える物）などにあずからぬよう、気を遣ったのである」。『完訳』は「薫が、禄などを心配させぬよう使者に早く帰るよう命じたか」と注す。＞とある。ということは、薫君は贈歌が妹君に対しては無礼な悪戯となることは承知の上で、だから当然にその使者が褒美に与る資格が無い、という態度を見せる事でその自覚を示して見せたのだろう。其処まで遣って、冗談が成立する、という演出だ、という話だ。と同時に、それは反面で、正使者が褒美を受け取ってしまうと、この使者の全ての役割が単に口先だけの冗談事になってしまって、薫君は姉姫に対しても終わりを認めたことになるので、それを避ける為に身を隠す事で、半分は本気だ、とは姉に対する恋情は贈歌にある文字通りに迫る心算だという意思表示にもなっていて、かと言って、使者が総隠れしてしまっては姫の返事が受け取れず、使者の役目自体が果たせないので、それではまた、この冗句が成立せず、隠れた使者が「かたへ(半分)」であることは非常に重要で、だとすれば、実に手が込んでいる。それに、これほどの仕掛けとなると気が利

き過ぎていて、それまでに同質土壌で冗句や戯れを繰り返し遣り取りしていた間柄でなければ、当たり前のように是等の意味が理解できる筈も無い。薫君にしてみれば、分からなければ匂宮に聞け、という心算なのかもしれないが、宇治姉妹と匂宮との関係も然程にはまだ練れていない段階に見える。まして、あくまでも薫君や匂宮とは異質土壌ながらも、自分からも妙な仕掛けをしてしまったという複雑な事情がある姉君にしてみれば、単に洒落が通じ難いという事に留まらず、自責の念に駆られてしまって、余計意固地になるらしく、非常に始末が悪い。といったようなことを語っているのだろう、と見当を付けて置くが、こうした文意は本文をざっと見ただけでは到底理解できず、彼是と考えて導き出したもので、本文は実に分かり難い難文であり、この理解も一応の筋でしかない。　*「ひかふ(控ふ)」は、此処では他動詞で＜引き止める＞と古語辞典にある。

「隔てなき心ばかりは通ふとも、馴れし袖とはかけじとぞ思ふ」(和歌 47-13)

「話しただけの親しさで、夫婦だなんて言わないで」(意訳 47-13)

*「馴る」は＜着古す＞という語用から「馴れし袖」に＜着古して柔らかくなった服＞という日常的な言い方が底にあって、「馴る」の＜親しむ＞という語用と「袖敷く仲(互いの服の袖を下に敷いて共寝する男女)」の連想から「馴れし袖」で＜夫婦仲＞が洒落になり、薫中納言が袖に書き置いた贈歌への返歌という体裁が付くのだろう。「かけじ」の「懸く」は＜言い掛ける＝言葉を口にする＞という意味で、下句は「とぞ思ふ」と理が立った言い回しの＜夫婦だなんて言わないで欲しい＞という反論だから、掛詞を使っているとは言え、歌筋はおよそ遊び心とは程遠く聞こえる。

心あわたたしく思ひ乱れたまへる名残に(驚くべき展開に混乱なさっている所為で)、いとどなほなほしきを(まるで当たり前の普通の御返事になってしまっている姉君の御返歌を)、*思しけるままと(今回もまた不調で、案じられた通りに洒落が通じなかったと)、待ち見たまふ人は(待ち受けなさった薫君は)、ただ*あはれにぞ思ひなされたまふ(ただ無風流なことに思われなさいます)。　*「思しけるままと」の敬語遣いは地文としての薫君に対するもの、なのだろう。ただ、宇治姉妹が洒落を解さないだろうと薫君に予見できたのなら、普通に考えれば、変に凝った真似をせずに当たり前の祝辞を贈れば良いし、それが大人の対応のような気もする。が、薫君の理解では、姫は十分に風流人なのであり、今はまだ不慣れだから堅苦しさがあるだけで、いずれは自分と一緒の感性で楽しく遊び合える仲になる、とでも考えているらしく、相変わらず試行を続けているということのようだ。薫君は根本的に姫の価値観と相違していることに気付いていない、という設定を作者は当然の前提として読者と共有している心算なのかもしれないが、そのすれ違いの表現方法の感性が私とは違うのだろうか、とにかく文意が分かり難い。　*「あはれ」は「いとどなほなほしき」に対する感慨だから＜無風流＞あたりの評価なのだろうが、姫の心情を慮れば、それではあまりに薫君が呑気に見える。が、何しろ都人の薫君にしてみれば、宇治は基本的に風流遊びの地であって、其処が生活の全てである姫の立場を理解していない。だから、今回もまだ不発に終わった、くらいの気分に「思ひなされ」るのだろう。また、それくらいの浮ついた気分でなければ、こんな＜悪戯＞は仕掛ける筈も無い、のかもしれない。